歴史散歩（24）

新たに国登録有形文化財となる
角屋旅館本館

２月１日号で紹介した油正ホールと同時に国登録有形文化財となる角屋旅館本館を紹介しよう。

角屋旅館本館は、伊勢別街道椋本宿の中ほどにあり、その名の通り鉤の手状に道が屈曲する角地に昔ながらのたたずまいを見せている。

旅館としての創業は江戸時代で、伊勢参宮の講札の最も古いものは文化３（1806）年にさかのぼる。軒下に多く掲げられた参宮講札に、幕末から明治時代にかけての盛んな伊勢参宮のにぎわいがしのばれる。

建物は、江戸時代末期に建てられたと考えられる切妻造り桟瓦ぶきの２階建てのものである。街道に面した表構えは、すり上げ戸を主体とする１階部分と、引き違い戸の外側に格子を密に入れた２階部分がよく保たれている。

主屋の玄関を入ると、西寄りに「上がりの間」「仏間」「八畳（はっちょう）」の畳敷きの居室３室、その東寄りに玄関土間と板間、さらに東寄りに土間、居住部分や帳場、台所を設けている。奥には「中八（なかはち）」「西六（にしろく）」の２つの客室からなる平屋建ての離れが連なり、坪庭が主屋と離れに挟まれる形で設けられている。

明治期以降の鉄道整備に伴い、こうした旅籠は衰退・廃業に至る例が多い中、角屋旅館のように美しく保存され、現在も営業が継続される例はまれで、街道沿いの旅籠の形態をよく伝えるものとして高く評価された。

（「広報津」平成20年３月１日号）

※旅館としての営業は平成25年12月に終了しました。